

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第	号
------	-------	---

氏 名 門 千行

論 文 題 目

越境する身体
—華語映画における妖怪表象に見られるクィアネスの可能性—

論文審査担当者

主査	名古屋大学教授	松下 千雅子
委員	名古屋大学教授	星野 幸代
委員	名古屋大学准教授	馬 然
委員	名古屋大学准教授	MCGEE Dylan

論文審査の結果の要旨

1 本論文の構成と概要

本論文は、中国で製作された妖怪を主題とする映画について、ジェンダー及びセクシュアリティ研究の視点から、俳優の身体を用いた妖怪表象を分析したものである。中国の妖怪文化は、先秦時代の民間伝説にすでに確認することができ、それ以降、現代に至るまで、各時代の社会・経済・政治的背景や大衆文化などの影響を受けながら、文学作品、演劇、映画に改編されることで、キャラクターや物語のバリエーションを増幅させてきた。中国において、妖怪は、人間が認識することのできない生物や自然現象に対する人間の解釈であり、規範や秩序に従わない物事のメタファーでもある。このような視点から妖怪主題映画を読み解いていく本論文は、妖怪が動物の姿を纏って繰り返し表現される一方で、妖怪を演じる人間の身体を媒介するパフォーマンスの中で、非規範的なジェンダーとセクシュアリティを可視化させてきたことを、歴史的な文脈を踏まえながら現代の映画作品を詳細に論じることで、明らかにしている。

本論文では、序章において、身体論、ジェンダー・セクシュアリティ論、観客論を理論的枠組みとして提示した後で、第一章では「白蛇伝」についての歴史的考察を行い、第二章から第五章において、『チャイニーズ・オデッセイ』シリーズ、『鍾無艷』、『画皮』シリーズ、『青蛇転生』の具体的な映画分析を行なっている。最後に終章で全体のまとめと、今後の課題と展望を記している。

まず、序章では、妖怪が持つ動物と人間との間の境界の越境性を、正常／異常の脱構築として捉え、妖怪の対極に位置する人間の身体を、規範によって絶え間なく修正されてきた正常化プロセスの効果であるとするフーコー的な身体の捉え方を、論文全体の大きな枠組みとして提示している。そして、過剰で逸脱した妖怪の身体を、クリステヴァのアブジェクションの概念を身体化したものであるとした上で、妖怪の越境性が、俳優の身体を媒介として、ジェンダーとセクシュアリティの越境として表現されてきたことを、歴史的に検証している。また、マルヴィによる観客論を踏まえ、妖怪を演じる俳優のジェンダー越境的パフォーマンスを観ることが、観客にとって正常からの逸脱による快楽を得る機会となる可能性を示唆し、観客論へと議論を繋げている。

続く第一章では、中国で古くから伝承されてきた「白蛇伝」作品群において、サブキャラクターであった青蛇がいかなる変遷を遂げてきたかを、歴史的に考察している。青蛇が名前のない老婆から、童女、黒魚、そして最終的に青蛇の妖怪へと遷移してきた過程や、青蛇として定着して以降、邪悪な女性から、妹・妻・母という模範的な女性像へと変化してきたことを、当時のジェンダーに関するイデオロギーの反映として丁寧に論じている。また、白蛇伝が舞台上で上演される際には、化粧、衣装、動作を用いた役者のジェンダー越境により、青蛇の逸脱性が表現されてきたことを指摘した。

第二章では、『チャイニーズ・オデッセイ』をはじめ、五つの『西遊記』から改編さ

論文審査の結果の要旨

れたパロディ映画において、妖怪を表現する手段として動物への変身が用いられてきたことを考察している。動物への変身というモチーフが、古典からパロディ映画に文脈横断する際に生み出される際に生じるズレが、越境的なジェンダー・セクシュアリティ表現によって可視化されていることを指摘した。

第三章では、コメディ映画『鍾無艷』における異性装やジェンダー越境などの表現が、「規範的な」ジェンダーとセクシュアリティをいかにして攪乱しうるかについて考察した。本章では、アナタ・ムイとセシリア・チャンという二人の女優に着目し、コメディという文脈において女優が男性キャラクターを演じることによってもたらされるクィア性を明らかにした。第四章においても、『画皮』シリーズ映画における女優の身体表象について考察した。

第五章では、1993年に上映された『青蛇転生』において、青蛇の「非規範的な」身体によって表現される越境的ジェンダーや性的欲望の表出が、観客に対して、規範的な日常の領域から一時的に逸脱する快楽を観客に与え得るという結論を導いた。

2 本論文の評価

本論文は、中国で製作された妖怪映画において、妖怪がどのように表象されてきたかを、ジェンダー・セクシュアリティ研究と身体論に基づく斬新で興味深いアプローチにより考察した好論文である。各映画のテキスト分析はそれぞれ独創的で興味深く、テキスト内の事象の分析にとどまらず、女優論、観客論に切り込んでいる。もっとも高く評価できるのは、白蛇伝の歴史的な考察において、伝統的な文学作品だけでなく、舞台演劇にも言及し、俳優のジェンダー越境を伴う身体表現が、青蛇の逸脱性の表現方法として使用されてきたことを明確にした点である。妖怪表象におけるジェンダーとセクシュアリティの越境性を、「クィア」という現代的な言葉で単純に片付けてしまうのではなく、中国文化の中で伝統的に用いられてきた表現方法として系譜的に丁寧に位置付けたことに、申請者の誠実さと、研究対象に対する真摯な態度が見てとれた。

その一方で、ファンタジーやホラーなどの映画のジャンルが、ジェンダー・セクシュアリティ研究や観客論とどのように交差しているのかについて、マルヴィやバトラーに言及するだけでは理論的枠組みが不十分だったのではないかという指摘がなされた。しかしながら、この指摘は全体の評価を損なうものではなく、申請者の今後の課題として示されたものである。本論文のように映像、ジェンダー・セクシュアリティ、身体、歴史文化など多領域にまたがる学際研究において、それぞれを深く結びつけ、総括するような理論的枠組みを提示することは、困難で挑戦的な課題となる。

本論文は、妖怪表象と逸脱的なジェンダー・セクシュアリティ表象の接点をつまびらかにした研究として、独創性と斬新さが高く評価できる。審査委員は全員一致して、本論文が課程博士を授与されるに値するものであると判断した。